

十 常住の春の國に居て

己れ一人の小さき我れを目的として、私利を謀るものは、己れ自身を衰微し滅亡せしむるものであつて、同時に國家も衰微せしめ、滅亡せしむるものである。人間は自己を本位として立つべきものでない、自己本位の者は、狭き境界に我と我が天地を縮めて生活する憐れな孤獨者である。利己主義の者は得をするが如くにて、實は最も多く損をするものであり、多欲に似て實は甚だ少欲なものである。

之に反し、我れの外に他人を含めて大なる我として、我々として之を愛し之が爲めに働かば、我れは實に廣くして賑やかな生活が營まれ、共同生活の共助の目的は達せられるのである。「大欲は寡欲に似たり、與ふるは取る所以なり」との古人の言も之を意味し、この目的の上に云ふべからざる趣味を感じ、趣味によつて其進路は類なき價値を生ずるに至る。趣味と目的、目的と趣味、相纏綿して離るべからざるに至る。我々てふ觀念は無限の光彩を發揮し來るべし。

噫、世の中は呪ふたものか、歌ふたものか。最初先づ呪へ、而して笑つて起て、起つて笑へ。親鸞聖人は先づ人生を呪うて、後に道を歌ひ恵を歌ひ、歌ひつゝ光輝ある九十の生涯を送られた。『正信偈』も歌である。『二門偈』も歌である。三帖の『和讃』は、實は大聖の金言と、列祖の論釋と、自身の了解とによつて、大悲の佛徳を讚嘆せられた感恩の伽陀である。聖人は世上の罪惡を慨き給ふ歌は少い。幾度も自分の罪の悲しむべきを歌はれたと共に、殊に多く本願の靈旨と淨土の榮光とを歌はれた。かくて其の歌は希望の曲であつた。「世の中安穩なれ佛法弘まれ」とは、衷心の感激であつた。

蓮如上人の生涯も左様であつた。焼かれ追はれ呪はれた。狂爛怒濤の八十

四年を通じて、不斷に如來の恩徳を讃嘆し、其の『寶章』は實に此の幸福を喜ぶ散文詩であつた。兩星は共に大悲の如來を仰いで、常に春のやうに若々と勇ましく歌はれた。冬枯のやうな人生に、いつも駘蕩の春をひろげて、本願の大道を御名の歌に進まれました。私共今にこの餘光に浴す、至上の光榮無限の幸福ではありませんか、いざ歌ひませう、笑ひませう。

大 笑 小 笑 終